

---

# 折れた翼

樹奈

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

折れた翼

### 【Nコード】

N6902E

### 【作者名】

樹奈

### 【あらすじ】

大好きだった仲間が墮天した。それなのにその仲間に羽をもがれたファイアーネは黄泉の国へとさらわれる……完結済み・バッドエンド気味・後日談更新予定

どうして。どうしてなの。貴方はそんな人じゃなかった。どうしてそんな風になってしまったの。

天国で一番真っ白で、穢れひとつ無い羽根を持っていた貴方だったのに。

早く昔の貴方に戻って欲しい。そんな真っ黒な羽根を持たないで。

一度堕ちてしまった天使は二度と天使には戻れない。闇の色を羽に宿し罪の業の分だけ羽の色はより黒く染まっていく。一度羽根に闇の色がついたら最後元の色に戻ることは無い。

可哀想なダーク。貴方には何も罪は無いと信じてあげる。

私達は人間と違ってすぐに罰がやって来る様に定められた。悪いのは私達をこんな風にした神様がいけないの。

黄泉の国への門で今頃あの人は審理を受けているだろう。せめて

……ダークにお別れを言いたい。

本当なら地獄について行きたいけれど私は人間達を救う「癒し」の役目を与えられている。人間を癒し、救うことが出来るのは……天使では私だけだから。

苦しんでいる人達を助けたいの。私は出来る限りの事をしたいの。黄泉の国でこれを見て私を思い出してくるようにと私の白く月のように鈍く光る髪を一房切り取って、貴方にお別れをしに行きます。

門ではいつもなら見張っている筈の黄泉の国への門番の天使は居なかった。

代わりにダークの闇に染まった羽根が見えた。今にも暗い地獄へと入りそうに見えた。

「待つてダーク！」

ダークは足を止めて待つてくれた。

「フィアーネ……」

耳元に甘く感じるダークの声が聞こえた。

ダークに名前を呼ばれば耳に心地よい調べとなって聞こえてくる。それは他の天使に呼ばれても感じない安らぎだった。

「お別れを言いに来たの。この髪を私だと思つて大事にして欲しい……」

漆黒の髪に闇色の眼をしたダークに私の切り取つた一房の髪を渡す。

悲しげに鈍く髪も光っていた。

ダークはまじまじと私を見つめる。その瞳が……なぜか怖く感じた。

いつも明るくて、からかつてきて、笑つていたダークの様では無い気がした。

「さよなら……ダーク……」

きつとダークも心細いのだろう。生まれたときからの故郷を離れて、見ず知らずの闇へと墮ちるのは。ダークの心情を思うとぼろぼろと涙が零れる。

「ついできてくれないのか」

「え？」

「一緒に墮ちてはくれないのか」

黄泉の国は仲間連中からさぞかし恐ろしいところだと聞いていた。悪行が横行し、讃えられる死者の国の女王ヘルと現世の守護神の王の治める世界とは比べ物にならないほど治安も悪いと聞く。

確かに行きたくはない。けれどダークに着いていきたいとも思う。兄弟のように過ごしてきたダークに。

「……私には現世の、苦しんでいる人達を助ける役目があるの。この役目は私にしか出来ないし皆を助けてあげたいの……分かつて……」

その時だった。背中に生えた羽根の付け根に耐え難い激痛が生じたのは。

引つ張られるようなその痛みに私は声を上げた。

「黄泉の国には悪魔と人間しか行くことが出来ない。ファイアーネ。お前は墮ちる事は無い。いつも行儀良くしてるもんな」

ダークのぞつとするように甘くなおかつ残酷な調べが背中から聞こえ、羽根を引き千切ろうとしているのはダークだと分かった。

「ダーク！ ……いや……やめて……！」

必死で逃げようとするものがつちりと腕で引き寄せられ逃げることも適わなかった。

血が付け根からばたばたと落ち凄まじい激痛が私の身体に襲う。

「お前が……羽根を失えば……一緒に行ける」

正気とは思えないダークの声を聞きながら私は叫んでいた。

「誰か……！ ……誰か助けてー！ ……！」

声が掠れるまで叫んでも誰一人来る気配は無かった。

「無駄だ。門番は俺が始末した。呼んだって誰も来やしない」

なかなか引き千切れない翼に痺れを切らした様にダークは手加減無く思い切り羽根を掴んだ。

最後の悲鳴を上げて私は暗い闇の中へと堕ちていった。

黄泉の国への門は……天国にあるけれども……天使達は門から離れて暮らしてる……

お前が居なくなつた事に気付くのはいつになるかな……

楽しいなダークの声が消え行く意識の中で聞こえた。

彼女の穢れ一つ無い月の様に鈍く光る純白の羽は、黒く染まりきった俺の羽に汚されることは無い。

彼女は永遠に清らかで、いくら俺が体を重ねても天使という本質は何一つ変わらないのだから。

彼女のその本質に俺はいくらかの安らぎを得た。

この闇に染まりきった体が例え悪魔の身から天使に戻ることは永遠にならうとも。いいのだ。俺は今のままが一番心地いい。ここは良い国だ。蝕まれる事も無く、良心に苛む必要も無い。

天国に居たときは毎日が苦痛だった。突然悪の心が常日頃から俺の体を占めてきて、天国の清浄な大気が俺を蝕んでいた。夜も眠れぬその痛みは日に日に増すばかりであった。

何も知らない天使達は俺の事を誉めそやし、体の蝕まれた俺の変調など気づきもしない。

天使は誰かを救うために在るのだと生まれたばかりの、鳥の雛の様な頃に教え込まれた。

それならなぜ天使達は俺の苦しみが分からないのだろう。  
こんなに痛いのに。こんなに苦しいのに。

俺は生まれながらにして異端の悪魔の血を引いていた。

俺の心は年月を重ねるにつれ闇に染まっていった。

何も知らないで俺に近づく天使達を内心嘲りながらも上手く立ち回った。

戯れに天使には異端とされている情交を美しい人間相手に行いその者を発狂させたりもした。

村の心優しい羊飼いの青年と結婚を控えた美しい女だった。

彼女の瞼から雫れ落ちる雫を俺は残虐的な思いで魅入っていた。

誰かを自分のものにする事に喜びを覚えた頃ファイアーネに出会った。

月の様に包み込んでくれる優しい彼女に。

彼女と居るときは俺の悪は不思議に収まり安穩とした気持ちの良  
い眠りを与えた。俺の汚らしい下卑た考えは彼女の眩しいほどの清  
らかな光に浄化され、俺は彼女と同じ綺麗なものになれた気がした。  
そんな考えは彼女と出会ってから今までの間に打ち砕かれたのだ  
が。

彼女の側に居る時でも、俺の体を悪が占めるようになったのは出  
会ってから数年も経たない内だった。呪われた血は徐々に俺を侵食  
し、遂には彼女を自分のものにしたいとまで思うようになった。

彼女だけは今までの様に傷つけたくなかった。これだけは本当だ  
った。

本当だったのに……

今、彼女は黄泉の国の汚れた空気に体が蝕まれたのだろう。

体を悪くし、ぐったりとベットに横たわっている。やろうと思え  
ば出来た。己の力なら人間になつた彼女を天国とまではいかなくて  
も、せめて自然に恵まれた地上に住まわせることも出来た。だが俺  
は出来なかつた。悪魔の体では天国にも住めず、地上に暮らすこと  
は出来ても地に嫌われる。この黄泉の国に住む事が己にとって一番  
良い事なのだ。

そして俺は弱つた体のファイアーネをこの手で掻き抱く。

悪魔としての俺の心の中で、僅かな、ファイアーネが俺に残した僅  
かな良心が疼こうとも。

折れた翼

ダークが笑ってくれるだけで良かった。私も幸せな気持ちになれた。ダークの笑いは皆を幸せにするほどの強く偉大な力があつた。きつと、天使でも人間でも一生かかっても難しい程の……

ずっとダークの事を凄くて良い人だと思っていた。

神から愛され、容姿が良い事も、頭が良い事も、人付き合いが上手で皆から慕われていた事も。

ずっとダークが羨ましかった。

私なんてダークの様な才能なんて一つたりとも持ちえなかった。

傍に居る時だつて嫉妬だつてしたし、自分を卑下したりもした。けれど 貴方が幸せじゃなかったなんて……私ちつとも知らなかった。私ちつとも知らなかった。

はらはらと涙が零れた。どうしてダークの変調を気づくことが出来なかったのだろうか。それなりに理解し合っていると思っていた。

けれどなぜダークが墮天したのかも、私の羽をもいで黄泉の国まで連れてきたのか、理由は知らない。

黄泉の国の門番を殺すような人には思えなかった。同じ、元は天使だつた時の仲間だつた筈なのに。

床にぽつりぽつりと落ちてははじかれる雫を見て、なぜ自分はこんなに弱いのだろうかと思つた。

もしかしたら助ける事も出来たかも知れないのに。ダークは見掛ければいつも人に囲まれていて、こんな私が声を掛けて良いのかと躊躇つて、その場を離れた事もあつた。

時たまダークは私に気づいて皆の前で私の所に来てくれた。取り巻きの好奇心な視線が嫌でたまらなかつたけれど、本当はすごく嬉しかった。

一番傍に居た親友では無かつたけれど、聞いてみれば良かった。

上手くいけばこんな四六時中間に包まれた黄泉の国の館に住まうことも無かつたろうに。

「……やっぱりこの国は嫌い」

殺風景な部屋の窓には紫の景色と共に、荒れた野や時には気味の悪い声を上げる鳥達が映る。それを見て溜息をついた。天上にはあんな怖い魔物なんて居なかった。例え天使でも心の中に魔物を飼っていても見えなかったから怖くは無かった。ただ、自分の醜さが嫌いだっただ。

でも、帰りたいたい……

でも……ダークを置いてまで帰りたいたい……？

ダークの揃いの漆黒色の髪と瞳を思い出して震えた。

なんて冷めた瞳、なんて残酷な笑み。

お互いが天使の頃にダークが浮かべた表情と対比すれば恐ろしい程違うように思える。

天使だったダークに惹かれたのはまぎれもない事実。

それでもダークが居なかつたら私きつと後悔する。

「馬鹿みたい……それならもつと、もつと前に言えば良かったのにな」

そうだ、言えば良かった。天使だった最後の日にでも、いくらでも機会はあったのに。

自分を慰めるように乾いた唇を人差し指でなぞる。

夕べなのか昨日なのかこの気候のせいで分からない。

けれどそこは確かにダークがこの部屋を出た時に湿った唇で触れていった場所。

そこを撫せていると知らない間に熱いものが指についた。

見ればそれは真紅の血のように赤い、やはり血だった。

もう遅い。今更この思いを伝えたところで何になる？

体が重い、節々が痛む、胸が痛い　　痛い

「ファイアーネ！　ファイアーネ！　大丈夫か……！」

と、悲痛な、聞いていて痛々しいほどの労わりの声私を呼んだ。

「……ダーク……」

私はほとんど寝たきりの状態になっていた。

発作が頻繁になり、度々意識を失う事もあった。そんな私をダークは見ていてくれた。

「死なないで、死なないでくれ　　」

ダークが私の胸元に縋る様に顔を埋めた。子供のような仕草に少し呆れたけれど、力の入りづらくなつた手でダークの頭を押さえてやった。

ダークの背には黒い羽が生えているのだろうか……

半ば他人事のように天井を見つめた。

「大丈夫。まだ死なないわ」

ダークを慰めるように頭をさすってやりながらそう言った。

「嘘だ。君が一番自分の体の事を知っているじゃないか。こここの所発作が頻繁になつてる。今日も、おとついだつて。五回目の発作の時だつたかな。俺が見ていなくなつた時に発作が起こつて　　その時はまだ軽かつたけれど段々発作が酷くなつてる」

顔を埋めたままダークは喋つた。ダークがどんな顔をしているのか分からなかつた。

「……よく、覚えているのね。大丈夫、大丈夫だから」

そう言うしかなかつた。

この、黄泉の国から出て私の病は多分治らない。

私は人間。天使だつた頃持つていた生き物の傷を癒す力も、ダークが羽をもいだと同時に失つた。

天使で癒しの力を持つていたのは天上では私ただ一人。そして

神だけ。

人間の疫病や心の傷を私の代わりに誰か癒してくれていると良いのだけど……

そのままダークは胸元に顔を埋めていた。

ダークのやった事はあまりにも酷すぎた。理解出来ない所業だった。

仲間を殺した、私の羽を折った、愛の言葉も無いまま体を重ねた……

けれどこの頃は十分すぎる程に大切にしてくれた……

今ではダークを許していた。だって実の所私はダークを愛している。

（俺がなぜファイアーネ、お前を道連れにしたのか教えてやる。目障りだった。お前の存在が、纏わりついて鬱陶しかった。常に善人面して俺がこんなに、こんなに痛んでいるのに、お前は気づきもせず笑っていた。そんなお前でも面倒を見てやったのに、見てやったのに！）

責めたてるダークの言葉が思い出され頭の中に響いていた。

初めて出されたダークの暗い一面、剥き出しになった傷ついた一面。

それに恐れ同時に自分を責めた。

これは、報いなのかもしれない。

黄泉の国の人間と天使への呪いが体を侵食しているのかもしれないが、人の内を考えなかった報い……

報いなら甘んじて受け入れよう。

この病で命尽きても良い。

けれど、最後までこの人の側に居たい。

その為なら、出来るだけこの人の側に居られる様に足掻いてみせる。

「……ダーク」

「え？」

ダークが顔を上げた。ダークの顔は泣き濡れてもいなかった。ダークは強い。

「……外に出たい」

「外に？」

驚いたようにダークは目を丸くした。

「うん。魔物ならダークが追い払ってくれるでしょう。ダークは強いし、たまには外に出てみたい」

「……いいけど。本当に、君にとっては気味の悪いものしかないぞ。本当に、何も無いからな」

念には念を押して、仕方なさそうにダークは言った。

「じゃあ、行きましよう」

久し振りに吸った外の空気はやはり汚れていた。  
白い絹のローブが空気に煽られる。

先程の発作で汗をかいてしまったからだろう。

空気は汚れていても、冷たい空気の流れが体に触れて去っていく  
事が心地良かった。

「いいか？ ファイーネ。もう館に帰った方が良い」

私の具合を知っているようにダークが言った。

「そうね。帰りましょう」

そろそろ体も限界に近かった。黄泉の国の侵食は館の中まで及んでいたが、外のほうも一層浸蝕が激しい。この体では疲れを隠せる  
筈もなかった。

返事を聞くとダークは私の右手を持って、てこの様に軽い力で立  
たせた。

ここは黄泉の国の丘。かなり高く、僅かに草が茂っているこの丘  
は黄泉の国を見下ろす事が出来た。ちらほらと、散らばる民家や屋  
敷には何が住んでいるのだろうかと恐れもした。

黄泉の国は、やはりこんな国だったんだ。

今までこの国の外に出た事が無かったから（出る気になれなかつ  
た）この光景は新しく見るものもあった。

気味の悪い色をした泥沼や、この丘よりずっと高い所にある上空  
の雲の上に乗つかるきらびやかな西洋風の城も見えた。

「ダーク。この光景をよく覚えておいて」

重い気持ちでダークに言った。これで

「どうして」

ダークが怪訝な顔をする。

「……何となく、よ」

「もうこの光景に見慣れている。覚えようとする必要が無い位、此

処の事は知り尽くしてる」

「ダークはこの国の事が好き？」

「……いきなり何を聞くんだ……いや、まあこの国の方が俺の体に合ってる。天上は体を浸蝕されてそれなりにきつかったしな。でも、ファイアーネ、君が思うのなら、その、まあ、なんだ。今更だけれど地上に住まわしても、良い」

ぶすつと、言葉を詰まらせながらダークが言った。

その瞬間、私の心は決まった。

ダークがそう言うのなら、私は

今までダークは私をここから帰してくれるなどと言わなかった。

それは翼をもがれたシヨックよりも酷い思いをした。私の体を蝕み、やがて殺してしまうだろう黄泉の国そのものに毎日、毎日怯えた。

この国に連れて来た、しかも最悪な形で連れて来てしまったダークを恨みたくても恨めず苦しい思いをした。

けれど、今言ってくれた。

「ありがとう。ダーク。でも、もう良いのよ」

ダークの背に手を回して懐に抱きつく。

これで

「ファイアーネ……？」

思い残す事は無い

「もう、良いのよ」

ここで涙は見せない。泣くのなら、もっと違つとこころで。

ダークの背は、昔と変わらず温かった。

あの日から二月も経たない頃、私はベッドから起き上がる事も出来なくなつた。そんな私をダークは励ましたり、時には発作の苦痛に喘ぐ私を見守つて眠らない日もあつた。

「ファイアーネ、大丈夫だ、君は死なない。だから生きる気力を持つんだ」

ダークの目は光っていた。

「ダーク」

泣かないでダーク。

自分の体の事は自分が一番よく知っている。このまま黄泉の国から逃れても、回復する体力も無くなつてしまった。

ダークの側に居たいとも思つていた。それは今でも思つている。

けれどそれよりも、優先しなければならぬ事がある。

その為に最後の力を取つておいてあるのだ。

最後の力は、ただ一人の　愛する人の為に。

「……早く休んだほうがいいわ。一週前から一睡もしていないのでしょう？　多分ダークが眠れば私も元気になるかもしれないわ」

ある意図を持って、少し打算的にダークに言った。

「な……」

ダークの顔が引きつった。

「ほら、目の下に隈が出来ている。端正なお顔に傷がつけば別の意味で目立ってしまうもの」

「……君は、俺をからかっているのか」

ダークは顔をしかめた。

「からかつてなんかいないわ。それにダークまで体調を壊したら私、胸が張り裂けてしまう。と、このように、ただ、わたくし純粹な気持ちで言っているのよ、ね？　分かる？」

笑つてダークにいつてやる。

「……ん。白々しいな。でも、確かに少し、少しだけだぞ、眠いだから、少し眠る。何かあったら気兼ねせずに俺を呼んでいい」  
「あら、ありがとう。そうさせて貰うわ」  
にっこりと笑い、シーツを顔に当てて今浮かべている表情を見られないようにした。

ダークが隣のベッドに腰掛けた気配がした。  
その数分もしない内にぐったりと倒れこむ音がした。

その音を聞きつけふらつく足を床に踏みしめて、ダークのベッドまで来た。

ダークが浅い眠りだと知ったのは契った日からだった。  
けれど近づく気配にも目覚めることなくこんこんと眠っている。  
上手くいったわ。それにしても、こんな打算的な事を考え付いて実行出来たなんて。

今までそんな事した事も、しようとした事もなくて罪悪感もあったけれど　　神様はきつと許してくれるわね。

これは私がダークに出来るただ一つの善行。  
さよならダーク。あの世へ行っても私達、出会うことは無いでしょう。

これで貴方の顔も見納めね。気が済むまで愛しいダークの顔を見つめてから、事に及ぶでしょう。  
自らの背を探るようにさすり、それを探した。

「つうっ……」

痛みに身を震わせながら一気に、背に残った最後の一枚の羽を手で思い切りよく引き抜いた。

残っていたのだ。あの時、ダークにもがれて何処かに行ってしまったとばかり思っていた翼の一部が。

その使い道に気づいた時には泣いて喜んだ。

その羽が背にある限り、私は天使で、僅かだが力を使う事が出来る。

ダークを 救える

最後の羽が抜かれ、この手でしっかりと握った今は私は人間になった。もう力は使えない。羽は力を使う事の出来るものを宿していた、その羽が無くなった今私は真正正銘の人間だ。

それから気が済むまでダークの顔を見つめた。

その表情は、不肖の息子を気遣う母のそれに似ていたと思う。

ダークが心配だった。

心配だった、けれども

私が居なくなってもダークはやっていけるだろうと信じた。

そう信じなければ、この命を手放しダークと居られる最後の時をも手放せなくなる。

やがて、思いついたように表情をきりりと引き締めて、自らの手に乗っかる銀色の美しく輝く一片の小さな羽根を見つめる。

「良かった……あの時羽が無くなってしまったのかと思ったけれど、羽が一枚だけ、残っていて」

ふっと息を羽に吹きかけると、羽はダークの口の中へ、そうして喉へ、腹へと自らの力が入っていった。

心臓が、ときどきと、動機までする。

「やだ……覚悟したんじゃないかったの」

心を決めていた筈なのに、なぜこんなにも熱い涙が出てくるの。死にたくないから？ いえ違う。違うわ。理由はよく分からない、分からないけど違う。

何、何か心残りがあるの？ 今更そんなものがあってどうするの。

「う……」

ダークが呻いて寝返りをうつた。

「あ……」

その顔を見て更に泣きそうになった。

あどけない顔だった。

無防備で、穢れも何も知らないような顔。

これだ。これがやつぱりダークなんだ。

黄泉の国に来てから、こんな表情をダークは私にしてくれた事が無い。

いつも引きつった顔か、顔をしかめて防御しているかのような、心を許してくれなかった。

「ごめんね、ダーク。そんな顔しかさせなくしてしまっ……ごめんね、許してね」

熱く燃えたぎる涙が、ダークの頬に落ちて、跳ねてしまうほど私はダークの側に居た。縋るようにダークの手を持って、力の入らない手で握る。

「ごめんね。ダーク。ダーク……」

もう、そんな顔をしなくても良くなるわ……

最後まで、重荷でごめんね……

ダークさえ、幸せになつてくれればそれで良い

黄泉の国に浸蝕された時でも優しく接したダーク。

本当は綺麗な心を持っているのにそれを出さなくなったダーク。

今、ダークを縛る鎖を解いて見せる……！

その晩、墮天使と天使のただ二人だけで住まう館から信じられないほどの光が溢れ、黄泉の国を照らした。

眩しい光は、地上も天上をも突き抜けるようにして遙か彼方に飛び去っていった。

館にはダークとファイアーネの姿は無かった。

何事も無かったかのように静まり返り、命のある気配すら無い。

忽然と消えたのはダークとファイアーネではなかった。

黄泉の国の住人達全てが消えて、後には住人達の住んでいた痕跡が見当たるだけだった。

無論その事を、天上の天使は誰も知らない。

墮天使と闇の住人達より圧倒的に力が劣る天使は、見えない影を見下しながらも、怯える日々が続くのだ。

**最終話（前書き）**

最終話です。

折れた翼

心地良い。

水のせせらぎの音が心地良い。

とぶとぶと、耳に注がれる音が、心地良い。

けれど浮遊感が、心を浮かせたままにして、少し頼りない。

いや、なぜ水の音が聞こえるんだ。ここは館の筈だ。

ゆつくりと瞼を開けば、それは青い空だった。

雲一つ無い、ぽっかりと浮き出るような青。

こんな光景を、俺は見たことが無い。

いつもいつも、恐れていた凄まじいほどの天上の浸蝕から逃れてからも。いつも、自分が悪い事をしているという罪悪感から逃れられなかった。

「う……………」

水面に浮かんでいるという事にようやく気づいた。

頼りない心地の理由を考え、やっと気づいたのだ。

右足を動かして、水面下の地面に足をつける。

やはり水だった。抵抗するように阻みながらもやがては受け入れる。

折れた翼

俺は、一体、どうして、こんな所に。

地に片足をつけたが思ったより浅かった。少し曲けても良いくらいだ。

次にもう片方の足を地につけ立ち上がった。

「な」

次の瞬間、目の前に広がったのは、眠っていたはずの館でもなく、黄泉の国の荒れた土地でもなく、かといってお綺麗過ぎる天上でもなかった。

「此处、何処だ」

地面は水、川か何かだろう。弱々しい微小な強さで流れていく。今まさに、俺の太股あたりまで浸かってふよふよとズボンを揺らしている。相変わらず水のせせらぎの音が流れていた。

あたりはふさふさと緑の葉をつけた広葉樹が沢山あり、ここが森か林である事が伺える。

天上は豪華絢爛な装飾の、作り物の樹。

黄泉の国は、枯れ果てた、骨の樹。

ここは 地上？

「何で、俺は、こんな所にいるんだ」

そう思いながら背に触れた。

先程から背に違和感があったのだ。まるで、その、何て言えば良いのだろう。……あつた物が、無くなってしまった様な、こそばゆい感覚。

指先が肩甲骨の辺りに触れた。

「何で」

確かめるように何度も指でその場所を行き来する。

けれども、あつた筈のものは無かった。

考えても結論は出なかった。

俺が眠っている間に、誰かがやったのか      ファイアーネ

瞬時に、脳裏に掠めたのは、俺が慕い、攫い、そうして貶めた人だった。

まさか、今まで、一度たりとも刃向かった事は無いのに。

そうだ。

今まで優しくしてやったのに、それを裏切られたという、ひっそりと隠していた痛みを分かってくれなかったという憎しみから、彼女を酷く傷つけた時でも、ただ泣く、それだけ。

そのフィアーネが、俺の翼を、失わせた？ なぜだ。

「何処だ、フィアーネ」

翼を失ったからでは無く、フィアーネが裏切ったのかという疑心から苛立ちの声を出した。

「ダー……ク？」

弱々しく、掠れた、聞こえないように小さな声を俺は聞き逃さなかった。

「フィアーネ……！」

有無をいわず声の聞こえた後ろに向かってばしゃばしゃと音を立てながらフィアーネの元へ向かう。ん

フィアーネは岸边に力なく横たわっていた。

フィアーネは、足元だけ水に浸かり濡れていた。

近付いてフィアーネの横にしゃがみ、足を水に浸かせない様にと抱き上げて岸边から離す。

フィアーネは驚くほど軽かった。

まるで、体に肉も詰まっていなと思う程に。

「ダーク……」

ほっとしたようにフィアーネは微笑んだ。

「フィアーネ」

拒絶されるような顔をさねなかった事が、無性に嬉しかった。

「……私達、同じ人間ね」

思いついたようにフィアーネが言った。声の調子は淡々と、けれど地につけたようにしっかりしていた。

「ああ、そうだな」

こんな体でも、俺のような下卑た奴に気を回すフィアーネが哀れで、けれど愛おしくてならなかった。

「……そんな顔をしないで。私達、今、こうして地上に居て、人間として、大地という命に触れてる。地上は黄泉の国と同じくらい穢れた感情が渦巻いて、天上と同じくらい痛みも何も、分らないけど、良いとこ無さそうに見える、けれどね」

黙ってファイアーネのたどたどしい言葉を聞く。

何を言おうとしているのか。

「綺麗じゃなくても良いのよ。必ず、何処の世界にも、貴方を愛して、くれる人が、いるから。だから、理解して。この地上で一生涯命生きて」

「貴方を救い、見守り、労わり、叱咤する人生のパートナーが、例え絶望した時に助けしてくれないにしても、ダークの事を想っている人がいるから。誰も傷つけないで、好きなように、生きて……」

「ファイアーネじゃなければ嫌だ」

何故、こんな言葉が、即座に出る？

物がましく愛しい人に執着し、一度も愛の言葉も貰えずに、いつも俺に気を遣ったり、優しくしようとしていた態度が丸分かりだったファイアーネに俺が言おうとしていた言葉は、こんな遠まわしな言い方じゃあ無い。駄目だ、こんな言い方。

「ありがとう……ダークの事が理解できた。私もね……」  
その時だった。

僅かなファイアーネの力が全身から抜け落ちた。

「あ」

「あ……」

「あ……」

口から言葉にならない声が漏れる。

先程から、ファイアーネの段々薄れていく声に怯えていた。

まるで、この世から消えていくような、あまりにも儚げな。覚悟はしていたつもりだった。

俺のせいで、ファイアーネがこの世から消えてしまうことも。それを承知の上でファイアーネを地上へ逃すような行動に出なかった。

酷い奴。

日々弱るファイアーネに、詫びるように尽くし、それでも離そうとしない弱い奴。

俺と一緒に居て欲しい。愛して欲しい。

ファイアーネは、いつも、いつも、俺の側に居た。

俺の満たされない空の心に注ぎ足そうとしていたのは、ファイアーネだった。

「ファイアーネ……！　ファイアーネ　！」

これから先、絶対にファイアーネは動くことは無いと分かっていた。赤みのさしていない青白い頬、だらりとした力無い手足、銀色の美しい髪。

もう俺に目を向けてくれない、笑った顔も、そして　これから先、理解する事もない。

「嫌だああああ！！！」

森中に俺の叫び声が響き渡り、危険を感じた生き物達が気配を消した事にも気づかなかった。

「帰ってきてくれ、帰ってきてくれ　　どうして、お前も俺も、こんな目の遭わなければならぬんだ　　」

ぼろぼろと涙が頬を伝った。

きりが無い程流れていく熱い、熱い涙。

経験した事の無い、昂り。

「あ、あ、あ、あ………」

ようやく自分の失ったものに気づいた、けれど。気づいた時にはもう遅かった。

失う苦しみの予感を感じても、愚かな俺は最後までファイアーネを

連れ回した。

「ごめん、ごめんファイアーネ。ごめんな……」

ファイアーネを俺の胸元にしっかりと抱きしめて、しきりに、本心からの詫びの言葉を口にする。

許しの言葉は永遠に返ってこない。

じつとファイアーネの顔を見つめた。

ファイアーネの瞳からはうつすらと涙が滲んでいた。

そっと触れてみると冷たかった。

ファイアーネ、君は、俺の事を、どう、思っていたんだ。

ファイアーネの体からそれを読み取るうとする。

そしてすぐに気づいた。

「俺は人間だから、もう分かる筈無い……」

最後まで、ファイアーネの俺に対しての気持ちも分からないまま。

憎かったのか。ファイアーネを傷つけた俺の能力が、だから、俺の翼を失わせた？ どうやって俺の翼を失わせたのか理由も分からない。なぜそんな事をしたのか理由を聞く頃にはファイアーネは居ない。それで苦しんで欲しかったのか？ ファイアーネを苦しめた俺を生き死にの目にさせたかったのか？

それは、それは　　もう永遠に分かる事は無い。

酷い。

酷い。ファイアーネの果たした最高の復讐は惨い。

最後まで、俺に詫びさせること無く、俺に対しての気持ちすら教えてくれなかった。

分からない、分からないよ。

これから何に向かって詫びれば良いのか、自分のしでかした事のせいで命を落とした死人を憎む事も出来ず、これから、どうしたら良い？

ダークは気がつかなかった。空に向かって飛び去り、仕方ないとはいえ自殺まがいの行為をし、命の理に反した罰を受けに行くファイ

アーネの魂を。

ダークがやがて、フィアーネの遺骸を大地に還そうと葬る頃、フィアーネは、天上から見ていた。

自らをここまで苦しめた世界全てを憎しみ、復讐心に燃えるダークの姿を。

フィアーネは泣き伏した。

散々泣き伏したあげく、フィアーネはダークの元へ行く事を許された。

それは苦しんだフィアーネへの天使たちの気遣いだった。

フィアーネは鳥になり、翼を羽ばたかせ、ダークの元へ地上へと飛び去った。

フィアーネのそれからの事は、知らない。

## 最終話（後書き）

最後までおつきあいありがとうございました。  
バッドエンド気味のラストでしたが、これから後日談を更新する予定ですのでお楽しみ下さいませ。

MY SITE

萌えと若草

URL; <http://www.milmil.cc/user/thanks/>

恋愛ファンタジーシリーズの小説を公開しております。よろしければお越しになって下さい^^

## 番外編 1 墮ちる

「頭が……痛いんです。それに　吐き気もする」  
黒髪の少年が訴えるような口様と眼をして、目の前の御簾を見上げて言う。

少年の背には見事な対の白羽根が咲き誇っており、理髪そうな顔立ちは少し翳っていたが才気に富んでいるように見えた。

「……成長期における副作用ではないかね。こうした例も少ないにせよ数例耳にしたことがある。時期が来たれば痛みも自然と消えよう。しばらく様子を見てくれ」

太くよく通る女声が、威厳たっぷりと言うのが御簾越しで聞こえた。

「でも、時々身体が引き攣れそうな位痛くなって。それに羽根の色も　」

何かを堪える様に少年は目をしっかりと開け、御簾の中の人影を凝視し言い返す。

「どんどん酷く、酷くなってきているんです。何かご存知ありませんか、何か　」

少年はひんやりとした大理石の詰められた床にくったりと手の平をつけ、縋るように御簾に視線を投げかける。

御簾から返事は無い。

代わりに少年のすぐ後ろに気配を潜めていた薄茶の髪の青年が何か少年の耳元に囁いた。少年は一瞬びくりと身を震わせ、すぐに頭を垂れた。

「お忙しい中……ありがとうございました神官様」

少年は地面についていた手の平を、硬い拳に変えて握り締めていた。

「下がれ」

形式ばった青年の声を聞いて、少年は立ち上がり扉まで歩いて錠

に手を掛けた。

「ダーク」

背後から、太く透き通った女声で呼び止められた。

「お前は優秀だ。期待しているよ」

朗らかな言葉を聞いて、少年は振り返りもせず部屋を出た。

「無礼な！ あいつを罰さねばならない」

青年は部屋を出た少年の後を追おうと足を一步前に踏み出そうとした。しかし目に見えない力がその行為を阻んでさせようとした。つた。

「シーン様！！！」

青年は前に進もうともがいたが、全くといって良い程進めなかった。

「私は貴方に仕えてきた。貴方を辱めた者は私が退けなければならぬ」

青年の瞳には、忠誠を表す神聖文字が浮かんでいた。御簾の中の女？はそれを見極め、口元に笑みを湛えた。

「ありがとう。セネガル」

「でもねえ、そういうお前にだから言える事だけど私の一番好きな瞬間はお前のような者が堕ちていく姿を見ることなんだよ。特に、あの子のように才覚がある子なんか特にね」

セネガルと呼ばれた青年は、喉元に込み上げてきた言葉を間一髪で収めきつた。

「こんな方ではなかったのに……哀れな方だ。」

「勘違いするなよ」

暗い韻を踏んだ声が御簾から出た。

「お前は忠実だ。時には目障りな程にな。だから何もかも奪って私のものにしてやった。だがな、ダークにはもつと才能があるんだ。底知れない何かが、天性の才能という奴だな。あれがどう道を外し魔道に堕ちていくのか見るのが面白くて適わんだ。おい、そんな顔をするな。私は正気なんだ」

セネガルの最後通牒とシーンの言葉を聞いて、ダークは部屋から去った後だった。しかしダークは自室に戻る帰路の途中に倒れた。ダークは短い息を荒げ、頭が燃え滾るような熱さを憶えていた。「くそ……あの女め。あいつなら、あいつならこの呪いが解せるかもしれないのに……」

シーンに言われたあの言葉が、僕をからかっているようだった。知っているのだろうか、この内の呪いを知っていて手を貸さないなら、僕はあいつを許さない。

「っ……」

大気に……蝕まれる。いずれ僕は死ぬだろう。

いやだ。死にたくない、死にたくない……

「おい、見える？ セネガル。あの子、とっても苦しんでるわ。私も、お前も、友達も、神様も、何もかもを憎み始めた。すごく、見ている気持ちいいわ。ぞつとする程気持ち良い。心地良いのよ。これからどんどん堕ちていくんだよ」

「ずっと見てあげる、ダーク。お前が魔道に堕ちるその日まで」

「くっくっくっくっ……はははははは……正気なんだぞ」

御簾の中の女声は急に笑い出した。セネガルはとても正気とは思えない御簾越しの女をぼんやりと見つめていた。

**番外編 1 堕ちる（後書き）**

完結から大分経ちましたが、番外編更新しました。  
ありがとうございます。

折れた翼

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6902e/>

---

折れた翼

2009年6月29日19時18分発行